

## State of the Salmon 2010 Conference 参加報告

ト部 浩一

2010年5月4～7日にかけて、State of the Salmon 2010 Conference が米国オレゴン州ポートランド市で開催され、この会議に参加する機会をいただきました。その概略につきましては、日本水産学会誌に寄稿しておりますので、その記事と内容が重複しますが、学会誌をご覧になれない方も多く、また、紙幅の都合で、ごく簡単な報告にとどまっているため、道中での出来事や現地視察の様子を加え、ここに改めて報告します。

まず、私たちが参加した国際会議 State of the Salmon についてご紹介します。State of the Salmon とは、米国オレゴン州ポートランド市に拠点を置く Wild Salmon Center と Ecotrust という2つのNGO団体が共同で2003年に設立した活動プログラムであり、環太平洋海域に生息する野生のサケマス類の評価と保全活動を行うことをその目的としています。この会議に、日本からは北海道大学の帰山雅秀教授、阿部周一教授、当場の永田光博氏、宮腰靖之氏、筆者の計5名が参加しました。

5月2日（出国～ポートランド）：新千歳空港で日本からの参加者全員が合流し、成田空港で出国手続きを済ませ、中継地のバンクーバーに向けて出発しました。機内では座席ごとにビデオを見るための小型ディスプレイが設置されており、長時間の飛行もあまり苦になることもなく、同日中にバンクーバー国際空港に到着し、オレゴン国際空港に向かう便に乗り換え手続きを行いました。乗り換え手続きの際、米国側の手荷物検査を受けなければなりません。手荷物検査の際には、靴も脱いで金属探知機を通過しなければならない様子を見て、アメリカに来たことを実感しました。事前に、アメリカでの手荷物検査の厳しさは聞いていましたので、特に大きな戸惑いもなく、手荷物検査を受けました。しかし、手荷物のうち、会議主催者へのお土産として成田空港で購入した日本酒（一定量以上の液体）は機内持込禁止であり、廃棄処分になると検査官から告げられ、その対応に苦慮しました。結局、廃棄処分は免れたものの、空港で保管し帰路に受け取るということになって

しまい、お土産を持たず、オレゴン国際空港に到着する羽目となってしまいました。オレゴン国際空港には Wild Salmon Center の Peter Rand さんと Brian Cauette さんが迎えに来てくださっていました（図1）。お二人に日本酒を持ってこられなかったことを告げると、大変残念がっていましたが、よくあるケースだと慰めてくれました。4日からの本会議に先立ち、5月3日から開催されるフォーラムについての打合せなどを済ませ、ポートランド市内の宿泊先に到着しました。

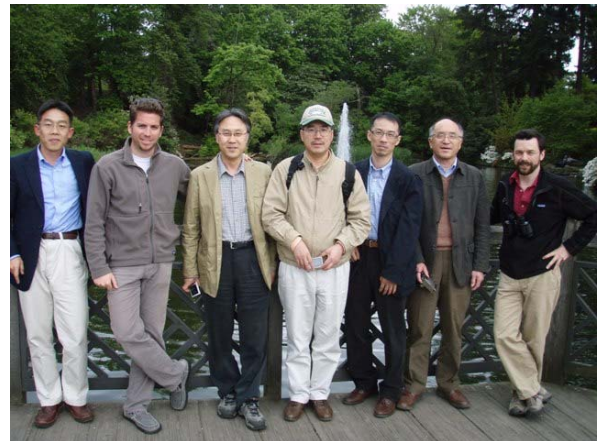


図1 ポートランド到着直後の写真。右端が Peter Rand さん、左から2番目が Brian Cauette さん

5月3日（フォーラム）：本会議開催に先立ち催されたフォーラムに参加しました。このフォーラムはサケマスの孵化放流に携わっている研究者、技術者らからの、孵化放流の現状やその効果等に関する研究成果についての報告を受け、それらに対して、意見交換を行うという形式で進められました。フォーラムの中では、主に放流事業のメリットとデメリットを適切に評価するための調査・研究の必要性について議論されました。私たち日本側の参加者からは北米の研究者らと同様の問題意識を持って調査・研究を進めていること、ただし、日本では野生サケマス資源の再生産環境が北米のそれと比較して、著しく劣化していることから、野生サケマス類の再生産環境の保全を進めな

つつ、放流により漁業資源を安定的に維持する、つまり野生資源と放流資源との調和が重要との報告を行いました。

5月4-7日 (State of the Salmon 2010 conference) : 5月4にちから4日間にわたって State of the Salmon 2010 conference が開催されました。本会議は『孵化放流が生態系に与える影響の規模と重要性に関する探索を行う』ことを目的としており、米国、カナダ、ロシア、日本の研究者やNGO団体メンバーにより合計46題に上る講演・口頭発表と26題のポスター発表が行われ、300名以上の参加者が出席しました。基調講演ではワシントン大学のRay Hilborn教授から、放流魚が野生サケ類に与える影響を最小限にとどめなければならないこと、そのためには予防原則に基づく孵化放流事業の順応的管理 (Adaptive management) が必要とされるが、現実には様々な制約からそれが実行されていないという趣旨の講演が行われ、その後のセッションでは、帰山教授を含む8名の研究者から、放流魚が野生魚に与える影響に関する発表が行われました。これらの発表は、野生生物の保全という観点から孵化放流を捉えた場合の問題意識に基づくものですが、別のセッションでは、当場の永田光博氏を含む6名の研究者らの発表に基づき、孵化放流事業を社会的、文化的、法的、経済的背景といった、われわれが営む生活との関係性のなかでどのように捉え、位置づけていく必要があるのか、野生魚とふ化場魚の調和という観点からの議論も行われました。また、別のセッションでは米国本土における代表的なサケ類生息河川であるコロンビア川水系において、かつてニューディール政策の下に建設された水力発電ダムによる生息場所の分断化や流域環境の悪化が一因でサケ類資源が減少し、先住民の河川内漁業や遊漁に必要な資源を野生魚だけで維持することが困難となったため、放流を併用しながら野生サケ類資源を安定的な水準にまで回復させる取り組みを先住民族やNGO団体、大学および州政府が連携して実施している事例について紹介されました。

最近のわが国においてもほぼ同様の問題意識に基づき、野生サケマス類資源に関する研究が行われています。このことについて、阿部周一教授、宮腰靖之氏、私の3名が報告を行いました。しかし、わが国における野生サケ類に関する知見は、北米におけるそれと比較してまだまだ不足してお

り、その保全・管理に関する方策を科学的根拠に基づき具体的に検討するまでに至っていないのが現状と思われます。北米とは地理的、文化的背景の異なるわが国において、本会議で行われた報告や議論をそのまま適用することはできませんが、野生個体群に配慮した、すなわち健全な生態系をベースとしたサケ類資源の持続的利用の方策を検討するためには、十分な科学的知見の蓄積とそれに基づく多様かつ建設的な議論の繰り返しが不可欠であること、また、そのためには漁業の現場との距離がより近い、私たちのような地方の試験研究機関に所属する研究者が果たすべき役割も大きいことを実感しました。



図2 発表者らによる集合写真

5月8-11日 (現地視察～帰国) : State of the Salmon 2010 conference の終了後、一部の会議参加者らとともに、オレゴン州で行われているサケマス類資源の増殖や保全に関する活動を視察しました。最初にオレゴン州政府が運営する孵化場を見学し、職員から孵化放流事業についての説明を受けました。この孵化場では、野生資源の補填を目的とした放流を行っており、また、その効果に関する調査も実施していました。野外調査の現場にも同行し、そこでは標識放流とスクリュートラップを用いて、放流効果の検証や野生資源のモニタリングを実施している様子を見ながら、調査担当者と意見交換することが出来ました。そこでは、私たちが北海道で行っている調査と基本的には同様の方法で、同様の内容について調査研究が進められているのですが、生活史の大きく異なる複数の種を対象に調査を実施していること、また、そのような調査を非常に広範な地域で行っていることに驚かされました。調査規模の違いは単純に予算と人員の規模の違いと思われがちですが、実際には予算、人員ともに私たちの組織とそれほど大

きな違いはないようで、NPO やボランティアとの協働により、広範な地域での調査が維持されているようでした。恐らくこの違いは、寄付行為 (NPO の活動資金) やボランティア活動に対する文化的な違いを背景とするもので、私たちも同じような方式を採用してもうまく行くとは限りませんが、今後、北海道のサケマス資源の増殖と保全を進める上で、一つの参考になることは間違いありません。文化的背景の違いが大きいとはいえ、このような調査・研究活動は米国の研究者たちのアウトリーチの広さに支えられているという面も大きいことを実感しました。これもまた、国民性の違いによる部分も大きいと思われるので、簡単に真似できるものでもないだろうと思われるのですが、サケマス類資源の保全は、科学的知見の集積に加え、多くの関係者の間での議論、合意、協力なくしては実現が難しいと思われます。そのような体制作りに、研究者としてどのように関わっていく必要があるのか、今回の現地視察を通じて問題意識を

持ちました。

2 日間にわたる現地視察を終え、State of the Salmon 2010 conference の全スケジュールが終了しました。5 月 10 日には往路と逆方向の経路で帰国の途に着き、翌 5 月 11 日には新千歳空港に到着することができました。不慣れな海外での研究発表に、毎日緊張の連続でしたが、非常に貴重な経験ができたことを実感しています。

最後になりますが、このように大変意義深い会議において発表する機会をいただき、また、招待して下さった主催者の方々、また、現地で様々なご配慮をくださった Wild Salmon Center の職員の皆さん、特に Peter Rand さんと Brian Caouette さんには心よりお礼申し上げます。

(さけマス資源部 うらべひろかず)